

京都大学

# 生態学研究センター・ニュース No. 40

京大大学生態学研究センター  
センター長 和田英太郎

Center for Ecological Research  
Kyoto University

---

## 目次

- 京大大学生態学研究センター協議員会報告
  - 自己点検評価の経過報告について
  - 共同利用委員会からのお知らせ
  - 公募研究会のお知らせ
  - センターを去るにあたって O. A. Timoshkin
  - 公募研究会の報告
    - フィールドワークから実験生物学へ 三枝誠行
    - 地球環境の変遷と微生物のサヴァイバル 片山葉子
  
  - 1996年度センター協力員追加リスト
  - 紫綬褒章おめでとうございます
  - 編集後記
  - 今後のスケジュール
- 

## 京大大学生態学研究センター 協議員会報告

平成8年7月、書類送付による協議員会が開催され、以下のような報告がなされた。

議題：リサーチ・アシスタント選考基準及び研究支援推進員選考基準

平成8年度より本センターにリサーチ・アシスタント2名、研究支援推進員1名が認められ、これらの選考基準についての了承を得た。

報告：

1. センター長の依頼により、安部琢哉教授が副センター長となった。

2. 施設整備費（蛋白質構造分析システム、安定同位体比精密測定用質量分析システム）が通り、当初の目的であった全国共同利用の二つのシステムが来年3月に整う。

3. 研究評価促進経費がみとめられ、外部評価委員会を発足させ、7月23日に第1回の委員会を開催した。

4. 概算要求の第1位として実験生態研究部門を申請した。

5. 平成9年度より以下の大型、中型プロジェクトを進めることがほぼ確定した。

(1) 創成的基礎研究

- 代表 川那部浩哉
- 幹事 安部琢哉
- タイトル「地球環境攪乱下における生物多様性の保全及び生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究」

(2) IGBP-MESSC

- 代表 和田英太郎
- タイトル「陸域生態系の地球環境変化に対する応答」

6. センターの移転

平成8年度土地造成の予算がつき、現在地元との最終の話し合いの段階にあり、これが済むと保安林解除、造成が今年度中に進む。

(文責：安部琢哉)

---

## 自己点検評価の経過報告について

### 和田 英太郎(京都大学生態学研究センター長)

当生態学研究センターは1991年4月全国共同利用センターとして10年間の時限で発足しました。生態科学の基礎研究・全国共同利用・社会への貢献をキーワードとして、この5年間活動を続けてまいりましたが、6年目の折り返し点で現在までの活動を振り返り、今後の方針と方向について見直しをすることを意図して、自己点検を行うことにしました。幸い研究評価促進経費もつきましたので、外部からの評価委員を委嘱し作業を進めているところです。委嘱した委員の方々は以下の通りです。

- 専門的評価委員会(敬称略)

伊藤嘉昭(沖縄大学)、巖佐庸(九州大学)、岩熊敏夫(国立環境研究所)、甲山隆司(北海道大学)、半田暢彦(県立愛知大学)

- 社会的評価委員(敬称略)

石井吉典(国立環境研究所)、大島康行(自然環境研究センター)、橘川次郎(オーストラリア・クィーンズランド大学)、甲山隆司(北海道大学)、近藤次郎(地球環境産業技術研究機構)、中村桂子(生命誌研究館)

第1回研究評価委員会は1996年7月23日午後、生態学研究センター(大津)で開催されました。出席者は岩熊敏夫委員、巖佐庸委員、和田英太郎、菊沢喜八郎(センター自己評価担当)、また伊藤嘉昭委員については個別に来所いただき意見を伺うことが出来ました。研究評価は主として、教官の業績、センターの国際シンポジウム、セミナー、共同利用の活動、教育などを対象として行われました。第2回目は9月12日に開催され、専門的評価委員の方は全て御出席いただき、貴重な意見と報告

書をいただきました。

社会的評価委員会は11月7日、大島康行、橘川次郎、甲山隆司各委員と和田英太郎、菊沢喜八郎が出席しました。近藤次郎委員には11月12日に個別に御意見を伺いました。

この最終的な報告書は自己点検評価委員会がその総意のもとにまとめた後、これに対するセンター長の意見、コメントを組み込み、当センター運営委員会に提出後討議し、協議委員会でオーソライズされる形となります。来年3月を目処に報告書の提出を予定して作業を進めております。

さて、これまで当センターはセンターニュースを通じて、可能な限りセンターの動きを関係者各位にお知らせし、御助言をいただけるような方向でその運営を進めてまいりました。今回の自己点検に関してもこの方針のもと、担当教授がその要約をニュースに載せておりますが、その中に事実に反する事項がございました。センターニュース No.39 に掲載されました第2回「自己点検評価委員会」の報告の中に「特に、まともな論文を書かないという、京都大学理学部動物学教室的弱点を引きずっているのではないか」という文章がございました。これは、評価委員会で討議された内容ではなく、事実とも反しています。担当教官も間違いを認め深く反省しております。とは言え、当センターのセンターニュースのもつ社会的意味は大きく、文章の最終点検を怠ったセンター長としての責を痛感致しております。京都大学大学院理学研究科動物学教室に深くお詫び申し上げます。今後は、このようなことの起こらないよう厳しく対処致す所存でございます。当センターは関係各位の日頃の御助言に負うところ多であります。今後とも一層の御鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。

---

## 共同利用委員会からのお知らせ

### 1997年度(平成9年度)京都大学 生態学研究センター共同利用事業公募要項

京都大学生態学研究センターでは、1997年度の共同利用事業の一部として以下の内容のものを公募します。

#### 1. 公募事項

(1) 研究会：生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会を募集します。

(2) 集中講義&セミナーおよび野外実習：学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場が限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

#### 2. 開催期日

1997年4月10日から1998年3月20日までの期間に開かれるものとします。

#### 3. 採択件数

予算は未定ですが、研究会約5件、集中講義 & セミナー・野外実習約3件の開催を予定しています。

#### 4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる方とします。なお上記のうち研究会は複数の研究機関からの参加があることが条件となります。

#### 5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、所定の様式による申込書を所属機関(部局)の長を通じて提出して下さい。申込書は、下記の申込書送付先に請求して下さい。

6. 申込期限：1997年3月3日(月)必着とします。

7. 申込書送付先

〒520 大津市下阪本 4-1-23

京大大学生態学研究センター 研究協力掛

TEL (0775)78-0579, 78-0580 FAX (0775)79-8457

(封筒の表に「共同利用事業申込書在中」と朱書きして下さい。)

8. 選考

当センターにおいて1997年3月末までに行います。

9. 所要経費

研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。研究会1件について20万円以内を予定しています。

10. 報告書および論文の提出

(1) 共同利用事業終了後、1ヶ月以内に報告書を当センターに提出して下さい。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターのニュースに掲載する予定です。

(2) 共同利用事業によって得た成果を論文等として発表した場合は、別刷り5部を当センターに提出して下さい。

この公募について、御不明な点がありましたら、当センター研究協力掛に御照会下さい。

---

      **公募研究会のお知らせ**      

**水循環と生物の関わり**

**- 水の安定同位体比を用いた研究の可能性をさぐる -**

**代表 大畑哲夫 (滋賀県立大学環境科学部)**

時期：1997年2月7日(金)～8日(土)

場所：京都大学理学部2号館(京都市)

生物にとって水は不可欠なものであることはいうまでもなく、水分環境に応じた植生のゾーニングは経験的にはよく知られた事実である。一方、地表面の水循環を考えると、植生の機能を抜きにしては語れない。水の動きは通常の水収支観測では追跡することが困難で、水循環の様子をとらえることは容易ではない。水の安定同位体比 ( $\text{HDO}/\text{H}_2\text{O}$ ,  $\text{H}_2^{18}\text{O}/\text{H}_2^{16}\text{O}$ ) は水の由来、および相変化の履歴を反映するので、これにより様々なスケールの水の動きを追跡することが可能である。水の安定同位体比を利用して、水の動きを知ることにより、水循環の研究にとって植生のどんな機能が重要か、また、生物にとって水循環のどんな側面が重要かが見えてくるのではないだろうか。将来、地球上の降水量の分布や地表面の水循環が精度よく予測できるようになった時、このような知識は生物圏の将来を占う重要な鍵となろう。今年度からスタートしているGEWEX-GAMEと来年度から第2期目が始まるIGBP-TEMAの文部省の2つのプロジェクトが連携し、環境科学の新たな分野を開拓する具体的研究計画に議論を発展させたいと考えている。

プログラム内容概要

- 前半：水循環研究に対して、水の安定同位体比を使って何が出来るか、何を期待するか。
- 後半：生物（植生）とのかかわり  
水循環にとって植生のどんな機能が重要か、植物にとって水循環のどんな側面が重要か。水の同位体比を用いて何が出来るか。

問い合わせ先：

杉本敦子（京都大学生態学研究センター）

電話； 0775-78-0580

ファックス； 0775-79-8457

e-mail； atsukos@ecology.kyoto-u.ac.jp

---

## センターを去るに当たって

O. A. Timoshkin

Dear colleagues,

First of all let me briefly introduce myself. My name is Oleg Anatolievich Timoshkin, born in 1959. I am working on Lake Baikal since 1980. During last 8 years I have been working as a head of the Laboratory of Hydrobiology and Systematics of Freshwater Organisms in the Limnological Institute of the Siberian Division of the Russian Academy of Sciences. The staff of the laboratory consists of 28 persons, well known specialists in the fields of taxonomy and ecology of nearly all groups of endemic fauna and flora of Baikal. Main trends of the investigations in the laboratory are taxonomy, ecology and phylogeny of Baikal fauna and flora. My own main scientific interests are general - comparative aspects of biodiversity and evolution of invertebrate faunas in ancient lakes, particularly biodiversity and evolution of free-living plathelminthes of Baikal. Total number of publications is 70. During last 10 years my colleagues have described more than 150 taxa (species, subspecies and genera), new for science; about 30 of them have been discovered and described by myself. More than 40 new turbellarian species are stored in my collection and not described yet. Besides Baikal, I have been investigating invertebrate faunas of White and Japanese Seas, freshwaters of the Central part of Russia, Russian Far East, Lake Michigan etc.

In the spring of 1996 I was invited in the Center for Ecological Research of Kyoto University as a visiting professor for half a year, to investigate "A comparative aspect of diversity and evolution of invertebrate faunas of two ancient lakes of the Earth - Baikal and Biwa". The idea to send me such an invitation belongs to Prof.Dr.Eitaro Wada and Prof.Dr.Hiroya Kawanabe. I would like to express them my sincere gratitude and thanks. The financial support of my investigations was provided by grant of the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Japan.

My 6-month-long stay in Japan was very successful from all points of view. First of all, of course - scientifically: (1) together with my colleagues from Japan, Russia and the Netherlands I have prepared 6 manuscripts, which have been accepted for publication in "Hydrobiologia", "Molecular Biology" and "Bulletin of Fuji Women's College". In those manuscripts we are describing 4 new species of Baikal turbellarians, discussing some problems of the comparative morphology, molecular biology, phylogenetic relationships and zoogeography of turbellarian faunas of Japan and Eurasia, including Baikal. (2) Two my own contributions (plenary lectures) on comparative analysis of speciation and evolution of flatworm faunas in ancient lakes of the Earth and four posters - on different aspects of turbellarian biology, were prepared and included in the Program of the 8th International Symposium of the Biology of the Turbellaria, held in Brisbane (Australia), in August 1996. It is a great pity that I have not been able to attend the Symposium even as a professor of the Center, with obligatory financial support for my trip and stay in Australia which was promised to me and my family by the Organizing Committee of the Symposium, because of corresponding customs for foreigner persons who is employed in Japan. (3) In stead of quite limited

area of expedition investigations on Lake Biwa (only car expeditions on the coastal region of the northern basin were possible to organize for my research on the basis of CER), very interesting results have been obtained. First of all, more than 10 turbellarian species, which have never been mentioned from the lake before, have been registered.

One of the species should probably be considered in the future as a new genus for science. Besides, new taxa of Hydrozoa, Turbellaria, Nemertina, Nematoda, Tardigrada, Crustacea etc. for Lake Biwa have been found. It is already the scientific fact that Prof.Dr.G.F.Mazepova has found a new Ostracod species from the samples. Generally, from the Lake Biwa I have collected more than 60 samples of total benthic animals and about 70 samples of the flatworms.

Many samples have been fixed for both classical morphological and molecular-biological investigations. The samples will be analyzed by leading Russian taxonomists, working in Irkutsk, Sankt-Petersbourg, Borok, Smolensk and other cities. The results will be published together with some of the Japanese colleagues, who have helped me for collection of the samples. Right now I am trying to find any grant foundation, which could be interested in the results of our biodiversity investigations of the ancient Lake Biwa, in the publication of new taxonomic lists, descriptions of new taxa found in the lake, and comparative investigations of the taxonomic biodiversity in the ancient lakes of Asia.

Well, according to my very fresh impression, Japanese biologists and an international zoological community should have very intensive future activity of the investigations on Lake Biwa which had well studied from the taxonomic view point. Right now the lake is very far from it. The last taxonomic list by Mori and Miura (see in Nakajima and Nakai, 1994; Arch.fur Hydrobiol.Beih.Ergebn.Limnol., 44) needs an urgent revision. Moreover, I am sure that dozens of invertebrate species, new for the lake and even new for science, should be found and described quite soon. It is my deep hope that alpha- taxonomical investigations on the famous lake will be considered as one of the most actual and topical trend of the investigations by my Japanese colleagues, that Japanese government and biologists will support the projects, aimed at the taxonomic investigations; that Kyoto University, known as the Number One in Japan in terms of ecological education and sciences, will be an University Number One in terms of taxonomic investigations and education, preservation of biodiversity. Please believe that we can not grow up a good ecologist, if he (she) does not know well the taxonomy of his (her) group under study. An ecologist without taxonomic knowledges can be compared with a person, who is trying to read an interesting book, without knowledges of the alphabet!

I also would like to hope, that Japan will be an excellent exception from the general trends in the present biology and will provide possibility to survive and develop not only for famous Japanese schools of taxonomists (fortunately still existing in Sapporo, Kyoto, Tokyo etc.), but also for the specialists on taxonomic biodiversity of Asian countries as well.

My impression about Japan is quite average. You have one of the most beautiful countries in the world. We (my family and me ) love Japan, exactly. My impression about the Japanese people is not as cloudless; I could not understand quite well the reasons, why the young generation could be sometimes so drastically different from the Japanese, who is about 40 years old and older. Hopefully, that is just my misunderstanding as a foreigner, who was able to live in Japan only for 6 months.

Finally, I would like to pass my sincere and deep thanks once again to Prof.Dr.E.Wada for his constant help, cooperation and unusual kindness, and to all colleagues and friends of the Center, who have made my life in Japan so impressive and fruitful.

Sayonara, and hope to see you again!

Yours very sincerely,

Oleg A. Timoshkin,

Head of the Laboratory of Hyrobiology and Systematics  
of the freshwater organisms,  
Limnological Institute SD RAS,  
P.O.Box 4199  
664 033, IRKUTSK  
RUSSIA

---

🌸 🌸 🌸 🌸 🌸 🌸 **公募研究の報告** 🌸 🌸 🌸 🌸 🌸 🌸

**フィールドワークから実験生物学へ**

**三枝誠行(岡山大学理学部生物学教室)**

日時：1996年7月26日 13時～19時

場所：京都大学理学部

参加者：17名

最近の生物学はいわゆる実験動物を使った研究が著しく進歩する一方で、自然の生物を対象とする研究は飼育の不便さや、材料の季節的な制約などから、特に実験領域の分野では敬遠されるケースが多くなっている。しかし、現在地球上に生存しているすべての生物たちには、それぞれ多様な環境への適応の歴史があったことを思えば、いわゆる実験動物からでは得られない多くの興味ある生物学的現象を見いだすことができるように思われる。この公募研究会は、自然の生物を使った実験生物学をどのように発展させていったらよいかを議論すべく、生理学や、発生学、行動学、また生態学を専攻する研究者の間に交流の機会を作るために行ったものである。研究会は、26日に話題提供があり、晩から27日の午前中にかけて御車会館に場所を移して多くのディスカッションが行われた。なお、話題提供者と講演題目は以下の通りである。

遠藤克彦(山口大・理・生物)「蝶の季節型発現の内分泌機構」

新井哲夫(芦屋大・教育)「多様な環境下における生活史の調節機構--幼虫休眠のコオロギ類を中心に」

田中彰(奈良女子大・理・生物)「チャバネゴキブリと私の生物学」

岩松鷹司(愛知教育大生命科学領域)「メダカの生態から見たその生息条件」

三枝誠行(岡山大・理・生物)「海産甲殻類幼生の孵化機構と潮汐時計による制御」

各々の話題に関して多くの質疑応答があり、予定していた時間を大幅に超過することになってしまった。また総合討論では、実験に使える生物が野外からどんどん姿を消して行くことに対する危惧が相次いで表明された。多くの生物が生存できる環境の維持、および創造は、私達にとっても重大な問題であることが痛感されたが、実際にどうすればよいのかという点については一致した見解には達しなかった。

私達の現在行っている研究分野には、解決を必要とする多くの重要なテーマが目の前にぶら下がっているわけではないし、特別な社会的要請がある訳でもない。研究者自らが面白いテーマを発掘し、それを現在使用できる最新の技術を使って解いて行かねばならない。その意味では、私達は問題を作って行く側である。大変な努力がいることではあるが、生物学のさまざまな分野の中で、多様な環境への行動的、生理的な適応の解析の分野が今後多少とも注目されるようになるためには、その基礎となる問題作りをしっかりと行う必要があるだろう、と感じた。

生物学を専攻する学生の中で、野外の動物や植物に興味を持つ人は生態学の道をめざすことが多いように思う。私自身も始めはそうだったのであるが、実際にやってみて、これは少し違うと感じた。それから方向転換し、今では自分に向いていた分野はやはり生態学ではなく、生理学や発生学的な方

面であったと思っている。ただ、こうした分野は今の日本ではほとんど発達していない。魅力のあるテーマが開発されていないせいであろう。しかし、私自身もかつてはそうだったように、野外の生物の示す行動や生態の中には生理学的、発生学的に見ても面白い問題があり、それらの中には生物学を進展させる可能性を秘めたものもある、と感じている人はそんなに少なくないと思う。そんな分野に果敢に挑戦できる仲間が少しずつ増えて行くことを私達は願っている。

---

## 地球環境の変遷と微生物のサヴァイバル

片山葉子(東京農工大学農学部環境資源科学科)

生態学研究センター主催の上記研究会は、岐阜大学教育学部会議室において平成8年8月24日、25日の二日間にわたり、延べ68名の参加者をむかえて開催された。本研究会の主題は、過去から現在に至る環境の変化(地球科学)と微生物機能の進化(微生物学)をリンクさせ地球の生態系を理解しようというものであり、岐阜大学医学部山本啓之氏が企画および運営に携わった。地球科学の分野からは、太古の微生物化石、縞状堆積物と微生物の作用、鉱物形成と微生物というテーマで、微生物の分野からは、原核生物の機能の進化と系統、微生物を通して見た環境の多様性などを中心に、全部で11の講演が行なわれた。以下に、その概要を紹介する。

大野照文氏(京大理)は”プレカンブリア代の生命の化石記録”という演題で、微化石として有名なシアノバクテリア以外にも、例えば渦巻き状の形をした炭素質フィルム化石などがこれまでにいくつも発見されており、一般の想像を越えて多様な微生物がこの頃すでに存在していた事を示した。川上紳一氏(岐阜大教育)は”縞々模様から地球史を解読する”の中で、堆積物中に形成される縞模様は環境の周期的な変化を反映し、過去の地球のイベントやその時期、あるいは地球環境と生物進化の相互依存関係(「生命と地球の共進化」)の解明にきわめて有用であることを示した。田崎和江氏(金沢大大学院)は”鉱物と微生物”というタイトルで、熱水環境や南極の氷面下で頻繁に見出される結晶構造物の生成と微生物作用の関与を中心に、バイオミネラリゼーションの実例を利用の可能性も含めて紹介した。

山本啓之氏(岐阜大医)は”原核生物の生態進化”の中で、16S rRNA 遺伝子の解析はこれまで不可能であった原核生物の進化系統を論ずることを可能とし、これによって得られた系統樹は過去の地球環境の変遷をよく反映していることを紹介した。そして、現在の環境に生息する原核生物の進化系統とその生態をさらに明らかにすることで、地球史もより鮮明になることが期待されることを示した。平石明氏(豊橋技大エコロジー工学)は”細菌の種と系統進化”と題して、細菌の種を認識することの限界と、環境中の微生物群集の識別をある菌群にとって特有のDNAプローブを用いて検出する方法、並びにそのデータを解釈する際の問題点について述べた。

以上の発表を基に、その後はそれぞれの生態系や微生物群について話題の中心が移った。まず、杉本敦子氏(京大生態研)は”メタンをめぐる共生系”の中で、シロアリの社会性の違いはメタン発生量にも影響を与えることやシロアリ自身もセルラーゼ活性を持つなどのデータを紹介すると共に、地球環境、特に温暖化におけるメタン発生源として微生物共生体が重要であることを示した。松浦克美氏(都立大理)は”光合成細菌の進化”の中で、光合成細菌の基本的な代謝機能、特に光合成の光捕集反応に関わる構造が光合成細菌の系統関係とどのように対応し、環境の変化に即応して進化したかを示した。丸山明彦氏(工技院生命研微生物機能)は”海底熱水活動域の微生物群集”の中で、熱水環境には培養が困難な硫黄酸化細菌や従属栄養細菌、バイオミネラリゼーションに関与するものなど多様な微生物群が生息し、生命の起源や生物の進化を考究するうえで重要なものであることを強調した。加藤憲二氏(信州大医療短大)は”原始共生系という考え方”と題して、温泉噴出域で独特なバイオマットを形成する原核生物群を原始共生系と名付け、温泉が造り出す環境は原始の地球を映し出す場であり、生物進化の研究における意義を紹介した。また、木暮一啓氏(東大海洋研)は”海洋細菌について”の中で、海洋環境での生存能力をナトリウムに関与したエネルギー獲得系を中心にまとめ、海洋が塩辛い環境へ変遷してゆくことと微生物の適応について考察した。

最後に那須正夫氏（阪大薬）は”新しい研究手法は本当に貢献できるのか”と題して、生態系の微生物群集を解析するための最新の研究手法を紹介しつつ、高度化に伴い発生するデータ解釈上の問題点や注意事項を挙げ、新しい解析手法の標準化とその手法の共有化がこの分野では今後重要となることを強調した。

原核生物での系統進化が可能となり、地球科学と微生物学という一見かけ離れていると思われる研究分野も、時間の軸をかなめに議論することができるようになった。この研究会を通して、地球環境の変化が新しい微生物を進化させ、微生物は反対に地球の環境を変えろという大きな力がクローズアップされたのではないだろうか。地球史と微生物学の合流は、真核生物誕生以前の太古の地球上での生物進化の理解と同時に、地球環境の将来を見据えるものであり、本研究会は今後の研究分野の新しい流れを模索する機会となったといえるであろう。

---

## 1996 年度京都大学生態学研究センター

### 協力研究員 (Guest Scientist) 追加リスト

---

氏名	所属	研究課題
竹門康弘	大阪府立大学総合科学部	河川・湖沼における棲み場所構造と動物群集

---

### 紫綬褒章

#### おめでとうございます

当センター協議員である糸川嘉則教授(大学院医学研究科)が紫綬褒章を賜り表彰されました。お祝い申し上げます。

---

### 編集後記

・No. 39 のセンターニュースの記事に関して、多くの方にご迷惑をおかけしてしまいました。お詫び申し上げます。

また、ご意見ご助言をいただいた方々に感謝いたしております。

・これまで2年間、編集を手伝っていただいた藤原美紀さんが退職されました。ご苦労さまでした。今号から、かわって青木和枝さんが編集を手伝ってくれることになりました。よろしく願います。

・皆様よいお年をお迎えください。

(杉本敦子)

---

## 今後のスケジュール

### センターの行事および委員会

1997年

- 2月20日 センター・ニュース No. 41
- 3月 センター・ニュース No. 42 (業績集)
- 4月20日 センター・ニュース No. 43
- 6月20日 センター・ニュース No. 44
- 8月20日 センター・ニュース No. 45
- 10月20日 センター・ニュース No. 46

### センターあるいはIGBP、DIVERSITAS、京大環境フォーラム関連の研究会

1997年

- 2月7日～8日 水循環と生物のかかわり - 水の安定同位体比を用いた研究の可能性をさぐる - (公募研究会)
- 3月10日～15日 International Workshop "Termites : Their Symbiosis, Sociality and Global Diversification" (Kyoto, Japan)
- 11月7日～9日 International Symposium "Biodiversity and Ecological Complexity" (Kyoto, Japan)
- 11月10日～12日 International Symposium "Biodiversity and Dynamics of Forest Ecosystems in Western Pacific and Asia" (Kyoto, Japan)
- 11月14日～16日 DIWPA Second Symposium "Monitoring and inventorying of biodiversity in Western Pacific and Asia" (Taipei)
- 11月17日～21日 26th General Assembly and Symposium of IUBS, "Frontiers in Biology: The Challenges of Biodiversity, Biotechnology and Sustainable Agriculture" (Taipei)

### 関連分野の研究会・シンポジウム

1997年

- 3月26日～29日 日本生態学会(44回)大会
- 7月13日～19日 Pacific Science Intercongress (Suva, Fiji Islands)